

# 呪いの口伝え

## 春錦亭柳桜口演『四谷怪談』における巷説の表象

齋藤 喬

SAITŌ Takashi

### 序

本稿は、明治29年(1896)に出版された落語家春錦亭柳桜口演『四谷怪談』を対象に、その物語の内部において「お岩の祟り」がどのように伝播しているかを考察することを目的としている。その際夫である伊右衛門ほか知己の者たちの謀略で破滅させられ怒り狂ったお岩が、暴れ回って失踪する直前に言い放った呪いの文句に着目する。というもの、お岩のまさにこのたったひと言が祟りの現象を起動し、彼女と直接関わった挿話の無い者たちをも巻き込んで、最終的には総勢18名が無残な死を遂げることになるためである。しかもこの『四谷怪談』の速記が寄席で実際に語られた口演に基づいているのだとすれば、彼女の怨念のこもった呪詛が直接聴衆の耳に触れていたという事実を強調しておく必要があるだろう。柳桜口演の怪談噺の現場において何が起こっていたのかというと、お岩の祟りに恐れ戦く登場人物たちが強迫的に呪いの文句を口から口へと伝えていったのと同型の語りで、噺家は聴衆へ生の声でそれを伝えていたのである。明治期の寄席事情を詳細に記した関根黙庵(1863-1923)によれば、人情噺の名手である柳桜の『四谷怪談』は晩年に

いたって円熟味が増したため、あまりにも恐ろし過ぎて客足が遠のいた逸話を持つという。<sup>1</sup>本稿ではこうした柳桜の口演速記を取り上げ、話芸が惹き起こす恐怖体験をテキストから読み取る試みの一つとして、呪いの口伝えについて寄席の聴衆や速記本の読者をも巻き込んだ巷説の表象という側面に焦点化しながら検討していくことにする。

### 落語版の枠組み

「お岩の伝説」を文芸化した「四谷怪談」には今日まで数多くの変奏が存在しているが、この論文では柳桜口演との関連で主なものだけを確認しておく。<sup>2</sup>

#### ① 実録小説

(作者未詳)『四谷雑談』(享保12年〈1727〉?)<sup>3</sup>

1. 関根黙庵『講談落語今昔譚』(山本進校注)平凡社、1999、217-218頁。

2. 江戸から今日まで続く「四谷怪談」の系譜に関する先行研究としては以下の文献を参照されたい。横山泰子『四谷怪談は面白い』平凡社、1997。高田衛『お岩と伊右衛門「四谷怪談」の深層』洋泉社、2002。

3. 『四谷雑談』には公刊された写本と現代語訳がそれぞれ二種類あるので以下に列挙して

② 歌舞伎（怪談狂言）

鶴屋南北『東海道四谷怪談』（文政8年〈1825〉）<sup>4</sup>

③ 落語（怪談噺）

春錦亭柳桜『四谷怪談』（明治29年〈1896〉）<sup>5</sup>

実在する田宮・伊藤・秋山の三家が「お岩の祟り」で断絶したという当時の醜聞に取材した実録小説『四谷雑談』は地下出版で刊行されたものとされる。ここには後代の歌舞伎と落語の原話と呼ぶべき記述が含まれているが、現存する写本として確認できるものには「享保12年」の奥書があるという。<sup>6</sup> 四世鶴屋南北（1755-1829）の手になる歌舞伎の『東海道四谷怪談』は文政8年が初演であり、明治29年に出版された落語の『四谷怪談』に比べてずいぶん先行しているように見える。しかし後者は明治期に春錦

おく。各版において編集が施されているため刊行物によって原典と照合することはできないが、本稿では柳桜の速記本と比較的年代の近い榮泉社版を取り上げている。公刊された写本①（編者不詳）『今古実録四谷雑談』榮泉社、1884年。②早稲田大學出版局（編）『四谷怪談』『近世実録全書 第四巻』、1929年。現代語訳①高田衛（編訳）『四谷雑談集』『日本怪談集 江戸編』河出文庫、1999年。②広坂朋信（訳・注）『実録四谷怪談 現代語訳』『四ッ谷雑談集』白澤社、2013年。

4. 本稿では主に以下の文献を参考にしている。鶴屋南北『東海道四谷怪談』（河竹繁俊校訂）岩波文庫、1956年。鶴屋南北『東海道四谷怪談』（諏訪春雄編著）白水社、1999年。

5. 春錦亭柳桜（口演）『四谷怪談』一二三館、1896年。（国立国会図書館デジタルコレクション）。

6. 『四谷雑談』の出版年代に関しては以下の論考を参照されたい。小二田誠二「怪談物実録の位相一『四谷雑談』再考」『近世文学俯瞰』汲古書院、1997年。

亭柳桜（1826-1894）口演の速記本となって初めて文字化されただけで、延広真治によれば、乾坤坊良斎（1796-1860）の作とされる落語・講談版は歌舞伎版に先行し影響を与えている可能性もあるという。<sup>7</sup> ただ、いずれにせよ今日一般に「四谷怪談」として知られているのは南北のものであり、先行研究はこの作品に集中していると言って良いだろう。また南北作には1979年刊行のJeanne Sigéeによるフランス語訳 *Les Spectres de Yotsuya* があり、柳桜の速記本には1917年刊行のJames S. de Bennevilleによる英語訳 *The Yotsuya Kwaidan or O'Iwa Inari: Tales of the Tokugawa* がある。以下、本稿においては今日まで命脈を保つ講談系の筋書きともさらに異なる細部を持つ柳桜のテキストに焦点を当てて検討を試みる。

それでは、落語版の出版において「お岩の伝説」がどのように導入されているかを確認しておこう。この書物には、柳桜の口演速記とは別に同時代の探偵小説家多田省軒の筆と見られる後書が収められているのだが、そこで本書の出版経緯について詳細が以下のように述べられている。

主人公は貞操義烈なる賢婦人にして其傲徳蓋し尋常にあらざるを以て斯は士女の敬尊を後世に受る所以なり〔中略〕館主云らく此れ他ならず四ッ谷稲荷の靈験神妙にして若し此が怪談を物せば四ッ谷稲荷の神怒に触れ時に神罰を蒙る事無しとせず加のみならず既に都下某書肆の如きは先年此が出版をなして為に神罰に触れ忽ち恐れて絶版せり故を以て此が出版豪もなき所以なり<sup>8</sup>

7. 延広真治「江戸の幽霊話—五人のお岩』『ばれるが』第289号、評論社、1967年、12-13頁。

8. 省軒「四谷怪談』『四谷怪談』、1896年、1（173）頁。\*引用に際し表記を改め振り仮名を適宜省略した。以下同様。

ここで省軒は、「四谷怪談」のお岩を「貞操義烈なる賢婦人」と紹介し、彼女の「傲徳」が尋常でないところから出版当時において尊敬の対象となっていると指摘する。その上で、発行元である一二三館の館主と省軒の会話において、彼女の祟りは四ッ谷稲荷の「神怒」に触れた「神罰」の顕現であり、東京都下の出版社はこれを恐れて「お岩の伝説」を出版したとしてもすぐに絶版にしまうため、出版物が残っていないと聞いたと省軒は言う。それではなぜ、一二三館のみがその祟りを免れて出版可能なのであろうか。省軒は館主の返答を以下のように伝えている。

蓋し唯だ天下の耳目をのみ喜ばすに汲々として其実績に反んする虚説を伝へしに因するなり其実績を伝えて世を益するようになさば豈何ぞ神怒に触るるの事あらん否必ず神護を得るなりと信ず故に予は進んで出版なしたる所以なり<sup>9</sup>

もしここに作家と出版社が結託して起草した惹句の意を含むとしても引用文にある出版経緯の言い訳はたいへん興味深い。柳桜口演は「四谷怪談」の真実を伝えているがゆえに、その関係者は祟りによる災厄を免れることができるだけでなく、四ッ谷稲荷からご加護を得ることができるのである。読めばすぐにわかるように、実際に速記本『四谷怪談』の中で登場人物のお岩が、実在する田宮家の屋敷神として祀られていたとされる稲荷を熱心に崇拜する場面が出てくるわけではない。しかしながら、「虚説」である出版物を刊行すると崇られる可能性がある「四谷怪談」も、唯一の「実績」であるこのような口演速記を刊行すれば逆に護ってもらえるという理路で語られているの

9. 同上、1896年、2(174)頁。

だから、省軒の後書はここで読者と直接向き合い出版関係者が書物を通じて触れてしまう恐れのあるお岩の祟りの現実性・実在性を強調していることになる。それならばこの速記本が「虚説」を含むものであった場合、この物語で描き出される災厄は四ッ谷稲荷の怒りを買って下手をすると書物の外に持ち出される可能性はないのだろうか。実際に柳桜口演は、お岩の菩提寺である鮫ヶ橋の妙行寺に明治維新の頃すでに無くなって彼女の墓を建て直し「得性院妙念日照大姉」という戒名をもらったと断った上で、信心者はそこに参詣して欲しいと最後に聴衆に呼び掛けて寄席を匆ねている。こうして、『四谷怪談』全篇を聞くこと自体が実在したお岩への供養と連結するという大枠が高座の噺家自身によって提供される点は、実録小説や歌舞伎にはない落語版のみの入れ子構造となっている。

ところで柳桜口演を英訳したベンネヴィルは、稲荷信仰に注目しながら「お岩の伝説」を以下のように要約している。

お岩は田宮家の息女で、元禄宝永年間(1688-1710)に実際に存在していた。それはちょうど八代将軍吉宗公の法改革の前日に当たる。彼女は夫らの冷酷な陰謀の犠牲となり、謀議に関わった者全員に自分の憤懣を仕向けることを誓って自殺してしまう。四谷にある於岩稲荷(狐に憑かれた於岩)の神社は、激怒している彼女の幽霊を鎮めるため早い時期に建立された(1717)。<sup>10</sup>

彼の解釈を敷衍すれば、「四谷怪談」の根底にあるのはお岩の「憤懣(rage)」であり稲荷神の化身である狐が憑依した彼女の怒りを鎮めるために1717年に神社が建立された

10. De Bennneville, *The Yotsuya Kwaidan or O'Iwa Inari: Tales of the Tokugawa*, 1917年9頁。

のだということになるだろうか。<sup>11</sup>しかしながら、柳桜の落語版においても原話となる『四谷雑談』においても、お岩の死は明確に語られているわけではない。夫伊右衛門の陰謀が露呈したことで彼女は怒り狂い、復讐を誓って失踪するのみである。よく知られた南北の歌舞伎版でお岩は舞台上で壮絶な死を遂げてから幽霊として再登場するため混同されやすいのだが、自殺どころか死んでいるかどうかさえも定かではないところもこちらのバージョンの特徴と言うべきであろう。寄席における怪談噺の恐怖体験を検討しようとする際に、お岩の死は「幽霊」の定義と合わせて重要な問題を提起するため、ここでは口演速記の物語の上で彼女は死んでいないことを強調しておく必要がある。それでは上記してきたことを考慮に入れながら、巷説の表象と崇りの顕現について考察する前提としてまずは実録小説と口演速記におけるお岩の人物設定の違いをみてみることにしよう。

11. 今日まで「田宮家於岩様」を祀る神社仏閣は複数存在しておりそれぞれ「四谷怪談」との浅からぬ因縁を持つものであるが、その主なものを挙げると次の通りである。①四谷於岩稲荷田宮神社(新宿区左門町17)。これは田宮家の屋敷跡であり、火災で移転したが昭和27年(1952年)に再び当地に移転したとされる。②於岩稲荷陽雲寺(新宿区左門町18)。これは日蓮宗の寺院であり、昭和初期に創建された。③於岩稲荷田宮神社(中央区新川2-25-11。これ)は、明治13年に①が火災のため遷座(一時移転?)したとされる。④妙行寺(豊島区西巢鴨4-8-28)。これは法華宗陣門流の寺院であり、門前に「お岩様之寺妙行寺」という石碑があり、中にはお岩の墓所がある。口演速記『四谷怪談』においてこれは慶応4年(1868年)に建てたと柳桜本人が言っているが、四谷鮫ヶ橋南町から明治42年(1909年)に移転したとされる。

## 『四谷雑談』における崇りの伝播

実録小説についてここでは1884年に榮泉社から出版された『今古実録四谷雑談』を参照して見ていくことにする。この本の冒頭には全体の枠組みとして、これが四ッ谷左門殿町の与力である田宮、伊藤、秋山三家をめぐるお家断絶の物語であることが明記されているが、その原因が伊右衛門の先妻お岩の「妄執」によると指摘している点が目を引く。

爰に四ッ谷左門殿町の住成御先手組與力田宮伊右衛門が先妻の妄執に因て其家を永く断絶し并に同組の伊藤喜兵衛秋山長衛門の両人も之が為家を失ひたる始末を如何にと原るに<sup>12</sup>

このことを踏まえて、まずは実録小説の前半のあらすじを要約してみよう。

四ッ谷左門殿町の同心田宮家の一人娘お岩は、器量も性格も悪く婿に来る者がいなかった。その内に父の又左衛門が死去したため、組の者はお岩を尼にするか他家に奉公に出すかしようとして言い聞かせたがお岩は家督を継ぐことに固執し言うことを聞かなかつた。そこで嘘つきの名人又市という男に婿探しをさせ、又市は伊右衛門という美男子の浪人を探し出した。お岩に会わせないまま婚礼の手はずを整え、伊右衛門は田宮家の婿養子になった。与力である伊藤喜兵衛に気に入られた伊右衛門は、喜兵衛宅へ通い詰めるうちに妾のお花と思ひ合うようになるが、そのことに気づいた喜兵衛はお花が自分の子を懐妊したことを契機に伊右衛門にお花との縁談を強要する。そこで伊右衛門は組の者たちと相談してお岩

12. (作者未詳)『今古実録四谷雑談』榮泉社、1884年、1頁(国立国会図書館デジタルコレクション)。

を追い出す算段をした。伊右衛門は博奕と女に狂った振りをしてお岩を散々に打擲し衣類その他一切を持ち出して売り払ったため、計画通りお岩の方から縁切りを申し出て他家に奉公に出た。それから伊右衛門は喜兵衛の指示通りに思い合っていたお花と婚礼を迎えた。

その後、顔見知りの煙草屋と出会ったお岩は、自分の現状について以下のように報告している。

伊右衛門は今にても放蕩止みえまじ那の様な男に添ひ居ては朝夕の苦勞絶えざるに因り我が方より縁を切御屋敷へ御奉公に出て見しが悲しき世帯を持て居らんよりいつそ安楽にて氣安く候伊右衛門は馴染の比丘尼を請出して内へ引取りしや流石の比丘尼もあの邪慳放蕩者には定めて愛想をつかせしならん今は何なる様子にて有しや<sup>13</sup>

お岩は、暴力を振るう放蕩狂いの伊右衛門に愛想を尽かして自分から縁切りをして田宮家を出たので現在の方がかえって気楽に暮らしていると言っており、ここには伊右衛門への恋慕やお花への嫉妬あるいは縁切りした田宮家への執着や父又左衛門への孝心といったお岩自身の感情的関心について、その内実が明示されているわけではない。しかしこの後、喜兵衛と伊右衛門が結託してお岩こそが正統な跡取りであるにも関わらずお花を嫁がせるために追い出すように悪巧みをして田宮家を乗っ取った挙句、現在では長右衛門が仲人をした伊右衛門お花の夫婦は仲睦まじく暮らしているという真相を聞いて、お岩は怒り狂う。そしてその様子は以下のように描き出されている。

お岩の顔色忽ち變じ今までは兎にも角にも人の形と見えつる處宛然惡鬼女夜叉の如く

13. 同上、1884年、12頁。

に變じ恨しや我斯る事とは夢にも知らず全く伊右衛門が放蕩なりと思ひしより喜兵衛殿にまで欺むかれし事の口惜さよアナ恨めしやシイ残念や三人の者共争で安穩に置べきや今に思ひ知せて呉んずぞと聲を振いし髮の毛を逆立起つ転つ切齒をなして泣出しければ茂助コハ由なき事を言ひ出したりとて身の毛もよたち恐しく思ひければ跡にも構はずぬき足して急ぎ我家へ逃歸りける然程にお岩は猶も狂ひ廻り雲をも突ぬく大聲を揚げ我を偽りし三人の者共並びには不義女お花をも助けは置ぬぞ永く子孫を取殺して此恨みを晴さんと更に人心地もなく口続けに呼わりければ<sup>14</sup>

実録小説の語り手によれば、お岩はここで変化して「悪鬼女夜叉」のようになり恨み言を繰り返して暴れ回るのだが、彼女の言葉が伊右衛門・喜兵衛・長右衛門の三人に騙されたことへの口惜しさの表明に集中している点に注意する必要がある。「不義女」とみなされたお花は首謀者たちと同列に扱われ、「永く子孫を取殺して此恨みを晴さん」と激越な復讐の対象になっているが、彼女の怨念が実際何を根拠にしているのかについてこれ以上の言及はない。そのため各々の「四谷怪談」作品はその内実について様々な解釈を表現することになるのだが、原話となる実録小説においてお岩が祟ることに関する具体的な動機付けを探ろうとしても実際あまり明確にはならないのである。今古実録版の『四谷雑談』でお岩の祟りによるという指示のある犠牲者を列挙すると以下のようなになる。

#### 伊右衛門方（七人）

- ① 次女お菊（三歳）
- ② 次男鉄之助（十二歳）

14. 同上、1884年、12-13頁。

- ③ 長男権八郎 (十八歳)
- ④ 女房お花 (四十三歳)
- ⑤ 伊右衛門 (\* 全身を鼠に喰い取られ死亡)
- ⑥ 長女お染 (二十五歳)
- ⑦ 婿養子源五右衛門 (\* お染の死後孤立し乱心)

#### 喜兵衛方 (三人)

- ① 二代目喜兵衛 (\* 吉原で起きた殺人事件に関わり処刑)
- ② 養子新左衛門 (\* 喜兵衛の死罪にとめない追放)
- ③ 土快 (八十九歳)

#### 長右衛門方 (五人)

- ① 娘お常 (十一歳)
- ② 女房 (四十五歳)
- ③ 長右衛門
- ④ 長男庄兵衛
- ⑤ 養子次男小三郎 (十三歳)

見ての通り、ここで明示的に祟りの対象となっていると言えそうなのは田宮家・伊藤家・秋山家の親族のみであり、その意味でお岩の怨念は彼女自身が発した呪いの文句を厳密に履行している。前述したように、そもそもこの実録小説自体は四ッ谷左門殿町での三家断絶の顛末について白日の下に真相を晒すという枠組みを設けて語り出されている。つまり、田宮家の先妻であるお岩の祟りによって三家に怪死が連続したという醜聞に支持されて構成されているがゆえに、この物語は犠牲者を律儀にその規則に従って配列しているように見えるのである。このようにして実録小説というジャンルにはある種の速報性が内包されているが、実録小説を翻案したとされる落語の怪談噺はまた別の様相を呈することになる。

#### 柳桜口演における祟りの発端

先ほど見たように、『四谷雑談』のお岩は性格も器量も良くない女性として描かれている。一方で口演速記『四谷怪談』のお岩は器量は良くないが貞女の鑑として設定されており、伊右衛門にどんなに打擲されようがひたすら耐え抜き、衣類その他を何もかも売ってまで夫の無理難題を実現しようとする。伊右衛門が博奕と女に狂った振りをしてお岩に縁切りを促すのは『四谷雑談』と同様の展開だが、こちらのお岩は(田宮ではなく)民谷の家督が傾こうが絶対に離縁しようとしないので、計画は一向に進まない。そこで業を煮やした伊右衛門の一味は、博奕で作った借金を返さないとお家断絶の上に伊右衛門自身も打ち首になると脅したので、お岩はほんの少しの間だけと説得されて、金を作るために遊郭に身売りする決意をする。しかしお岩は、そこでも伊右衛門に操を立てて、頑として客を取らないために死ぬほどの拷問を受ける。このようにして、落語版『四谷怪談』の岩にとってもっとも重要なことは自分と結婚してくれた伊右衛門への真心であり、そのために民谷の家や自分の命でさえも二の次になっている点が際立っている。

以上のように、伊右衛門に命懸けで尽くす貞女の鑑という人物設定上、生涯の間夜鷹に売られたお岩は、毎晩拷問に掛けられても客を取ろうとしないので、とうとうその代わりに飯炊き女として奴隷同様に働かざる。そのような折、遊郭に物売りに来ていた伊藤家の使用人である角助と出会い、四ッ谷左門町でお岩は八百屋と間男して駆け落ちしたと評判になっていることを告げられる。

岩「エー……角助どん情けない<sup>わたし</sup>妾は不義を働くやうな<sup>をんな</sup>婦女ではありません……明店

同様の家だから錠が下りて居ませう子」  
角「ナニ和女さんの家にはチヤンと伊右衛門さんが居るよ二三日已前の事でげすわっちととも小主人家の娘のお花さんと三十郎さんが里に成て和女の家へ嫁に遣てお花さんと伊右衛門さんと夫婦揃ってチヤンとして居よハハハハ和女さんはおまへ姦通まおとこをして駆落をするなんてへのは馬鹿気てへるぢやア有ませんか」<sup>15</sup>

『四谷雑談』との対比で言えば、この引用文から柳桜口演において「不義女」にされるのは、お花ではなく駆け落ちして姿を消したことにされたお岩の方であることがわかる。このようにして、伊右衛門が自分を追い出した上でお花と婚礼したと聞かされたお岩は、烈火のごとく怒り狂い関係者全員を取り殺すと宣言する。

① お岩から角助へ（本所割下水）

岩「さてこそわたし妾を命の有らん限り夜鷹に売たに相違ない、おの汝れ風車長兵衛伊藤快甫河井三十郎始め伊右衛門に加担した者は残らずとり怨殺おのさすにおくものか」<sup>16</sup>

前述の通り、『四谷雑談』のお岩が道楽の過ぎる伊右衛門に自分から縁切りをして他家に奉公に出たのとは異なり、『四谷怪談』のお岩は伊右衛門への執心を隠すことなく、民谷の家督には見向きもしないで夫のために尽くしてきた。これは『東海道四谷怪談』のお岩が、どんなに伊右衛門に邪慳にされようとも民谷の家督と父又左衛門に対する忠心を貫く姿とも好対照を成している。このように落語版のお岩においては、伊右衛門への恋着が根底にあって、お花との婚礼に加担した者全員に憤懣を爆発させると

15. 柳桜、1896年、95頁。

16. 同上、1896年、96頁。

いう成り行きになっているのである。

さて、ここから始まるお岩の祟りについて、祟りの文句に着目しながらその伝播の経路を確認しておこう。先ほど見たように、快甫の娘のお花を嫁にもらったというだけでなく、出入りの八百屋と不義をして駆け落ちしたという噂が流されていると聞かされたお岩は、角助に呪いの文句を吐いて消失するというのがまさに初発の場面である。この呪詛はその後断片化しながら、お岩が売られた本所割下水から仲介をした長兵衛が住む浅草花川戸へと伝わって行く。遊郭の主人である藤右衛門は、お岩を自分の妹だと偽って売り飛ばした長兵衛に事の真偽を問い正すべく使いの者を遣わすが、まさにそこで長兵衛にお岩の文句が伝わることになる。

② 藤右衛門の使いの者から長兵衛へ（浅草花川戸）

使「御家人の鼻アを命の有らん限り夜鷹に売て……今朝コレコレで鬼の様に成たと云ふ大変な騒ぎだ落付て飯をくは喫れた義理ぢやアあるめへ」<sup>17</sup>

藤右衛門の使いの者は、自宅でのん気に食事を取っている長兵衛に事の重大さを告げるため、つい先ほど本所でお岩が激怒しながら角助に吐いたせりふの一部を繰り返す。だが長兵衛はそれに動じることもなく、使いの者と連れ立って藤右衛門のところに出掛ける。むしろこの言葉に衝撃を受けたのは、長兵衛の妻のお瀧であった。お瀧は民谷の息女であるお岩に世話になったことにたいへんな恩義を感じていたため、長兵衛が彼女を騙して命のあらん限り夜鷹に売るなどという事態をにわかに受け入れるこ

17. 同上、1896年、97頁。

とができない。その後、お瀧は近所の女房に、まるでお岩が乗り移ったかのように一人称で例の文句を繰り返す。

瀧「マア聞いてお呉れ是も家の為め良夫の  
為めと思って辛抱をしたが今朝角助に聞  
いて見れば妾を無理に悪計へ落して伊藤  
の娘お花と伊右衛門と親睦く夫婦になら  
うが為めに妾を命の有らん限り夜鷹に売  
ると云ふは風車長兵衛夫婦と云ひ伊藤快  
甫始め伊右衛門に加担した者は残らず怨  
殺すと和女能く然う云てお呉れ」<sup>18</sup>

それからお瀧は、物音を聞いて駆け付けた近所の女房が見ている前で、自分の乳飲み児を喰い殺し、物干へ上がると出刃包丁を口の中に突き立てて絶命する。

瀧「エー此嬰兒から」  
と云ひながら赤ン坊の頭を捕え片手で手を持ち喉へ口を宛がひウンと喰ひ付きズイと頭を擡げると口の辺が真赤に成ているから来て居た内儀さんはあつと云て腰が抜てしまいましたお瀧は赤坊の手と足を持ってビリビリと引裂いて流しへ打付け、出刃を持ち物干へ出まして出刃を取直し我と我が手で自分の口の中へツブツブと突通し物干から下へ転け落ち溝板の上で死んで仕舞ましたから近所の者は大騒ぎを致し「サあ大変だ今囀戸の女房が気が違って小児を喰ひ殺した」といったのが隣へ行くとナニ五人喰ひ殺したと云ひ其隣では十人だと云ひ二三町隔た処では百人も喰ひ殺した様に云て騒いで居り升る処へ」<sup>19</sup>

これが、落語版の『四谷怪談』においてお岩の呪いの文句が発せられた後に初めて死者が出る場面である。夫長兵衛の行いに對してお瀧は罪の意識を抱いており、許し

18. 同上、1896年、98-99頁。

19. 同上、1896年、99-100頁。

がたいと嘆くところにお岩が憑依した形で彼女のせりふを繰り返して悲惨な末路を迎える。

さらに呪いの文句はまた別の経路をたどり、本所割下水でお岩と直接対峙した角助から、今回の悪巧みの首謀者で、四ツ谷左門町に住む伊藤快甫へと伝わる。

### ③角助から快甫へ（四ツ谷左門町）

角「ナニ伊右衛門さんは小哥主家の嬢さんと夫婦に成てコレコレと云ふと口惜しいとつて突然り小哥の胸倉を取りまして伊藤快甫始め伊右衛門に加担したものは残らず怨殺すと云ひましたが尊公が初筆でお芽出度う御座い升」<sup>20</sup>

お岩に名指しされていない角助はまるで他人事のように、ややコミカルな調子で快甫に彼女の様子を報告するが、この場面は先ほど見たお瀧の死というシリアスな出来事と一席の内部で連続している。お岩に胸倉を掴まれた恐怖心の裏返しであろうか、角助は快甫が取り殺される筆頭に名を連ねていることをまるで慶事のように報告してしまう。

この後、快甫はすぐさま伊右衛門を呼び出して、「伊藤快甫始め伊右衛門に加担した者は残らず怨殺すと云て乃公が初筆だがお岩が来たら何う仕様」とお岩の呪詛をそのまま繰り返す。快甫の泣き言を聞いて伊右衛門は「来ましたらお斬り捨て遊ばせナ」と冷やかに返事をし、その上で「御隠居尊公は二百三十俵輿力で鎗一筋馬一疋の主で有りながら幽霊が可怖ようではお上に対して済ますまい」とたしなめる。しかしこれ以後快甫は「神経病」となって、謀略に加担したお岩の影だけでなく若い頃に自分

20. 同上、1896年、100-101頁。

が毒殺した使用人の伊助の影にも悩まされた拳句、最後にはお瀧と同じくお花に向かって一人称でお岩の呪いの文句を語り、ついには全身を鼠に齧り取られて絶命する。

快「<sup>てめへ</sup>汝のお蔭で乃公を見ろ命の有らん限り  
能も能も<sup>おれ</sup>乃公を夜鷹に売たナ」

と快甫が娘お花に向って云ふ事は皆お岩さんの怨み言ですからお花は震へ揚って仕舞ひ看病処ぢやありません<sup>21</sup>

そして本所から浅草を経由して四ッ谷まで持ち込まれたお岩の呪いは、ここからはもう口伝えによらなくてもその効果を發揮していく。お岩が生活に窮して頼りにした時、彼女の叔父である與左衛門はお岩の父又左衛門と不仲であったこともあり、伊右衛門との婚礼にさえ招かれなかった。與左衛門はそのことを根に持っていたため、お岩の懇願に対して何の援助もしてやらなかった。そのことについて與左衛門の妻お兼は、まるでお岩が憑依したかのような体裁を取って夫に恨み言を宣べ立てる。

兼「コレ能も能も乃公が米を借に来た時に  
汝は溝へ<sup>うつちや</sup>遺棄る米が有ろうとも乞食に  
呉れる金が有ても貸す事は出来ないと拒  
絶のみならず乃公に痰を吐き掛けたナ」  
〔中略〕

兼「ハハハ宜い気味だ<sup>いま</sup>早晩に見ろ此左門町  
へ草を生さなければ成仏ねへぞ<sup>うかま</sup>」<sup>22</sup>

このようにして、お兼は一人称でお岩のごとく語りながら、焚き立てのご飯を水柄杓でどぶの中へ掬い投げ、それから十能で熾火を畳へ放り出したため、與左衛門が近所の者に助けを求め、皆でお兼を縛り上げて戸棚の中へ押し込めてしまう。この時点

21. 同上、1896年、112頁。

22. 同上、1896年、117-118頁。

までですでに、お瀧とその赤ん坊、快甫が惨死しており、お兼が狂気に陥ったため軟禁されるという事態が生じている。ところですでに述べたように、落語版『四谷怪談』のお岩は失踪ただけでその生死は不明である。そのため、明確に死者の霊として出現する場面さえもないと言える。快甫の場合は噺家によって「神経病」と診断され、罪の意識で錯乱しているために幻視が生じているという設定に物語の上ではなっている。つまりお岩の言葉以外に明確な指標が何もないまま、四ッ谷左門町は異様な出来事が頻発する状況に陥って町全体が恐慌を来しつつあるのだ。しかも名指しされて犠牲になったのは今のところ快甫のみで、お瀧や赤ん坊、お兼は謀略に加担した者の家族であるという以外にお岩との接点はほとんどない。お瀧の場合は民谷の息女を敬愛さえしていたのだが、結果としてお岩に成り代わって呪いの文句を口にして、死に行くことになっている。しかし、お岩の怨念が込められた呪いの文句はここで止まらずに、この後も不条理で理不尽な祟りの現象としてこの界限をさらなる恐怖に陥れることになる。

### 祟りの伝播と巷説の表象

本所割下水の藤右衛門宅で端を発した「お岩の呪い」は、浅草花川戸の戸澤長屋にある長兵衛宅に寄り道をしてから、四ッ谷左門町の伊藤快甫宅と民谷與左衛門宅へまで伝わったわけだが、ここに来てついに祟りの一件は組中の評判となっている。

今度は乃公の処へ来やアしないか今度は乃公に取りつきやアしないかとお組の者は皆一同に恐れを為し夜分門外へ出る者は有りません〔中略〕<sup>よんどこ</sup>據ない用が有て夜分可怖な<sup>おつか</sup>驚愕<sup>びつくり</sup>でお組を歩行き向ふを見ると人が付立

て居りますから 甲「其所に居るのはお岩じゃアねへか」といふと向ふの人も此方を見て 乙「お岩ぢやアねえか」と両方で疑ッております一方<sup>かたかた</sup>でキヤーと云ふとこちらでもキヤーと云てまるで両方<sup>おどかし</sup>で恐怖コをして居るやうなもので<sup>23</sup>

こうして四ッ谷左門町では、住民の誰もがいつどこでお岩と遭遇し祟りの被害を受けるかわからないという雰囲気<sup>きふん</sup>に包まれている。そんな中謀略に加わった者の一人である河井三十郎の娘お玉が欄干の上から落ちて庭の忍び返しに喉を突き通して絶命したことを受け、河井の使用人吉兵衛が、お玉を可愛がってくれた僧侶妙善を鮫ヶ橋から左門町まで連れてくる。吉兵衛にとって、四ッ谷左門町に向かうまさに門こそがお岩の祟りが渦巻く地獄の入り口となっているため、臆病風に吹かれながら彼は妙善に対して共感を求める。

吉「吾儕等は一季半季の使用人だから祟も  
へツタクレも有りやアしねへ然うぢやア  
ねへか」〔中略〕

吉「サア妙善是からだぜ此門を入る堪らね  
へ気の所為かゾツとする民谷<sup>うち</sup>の宅の前  
を通り越さねへと乃公の宅へは往けねへ  
ンだ疾走<sup>かけ</sup>ようぜ疾走ようぜ」

と云ひながら腕巻りをして尻を端折り両手に下駄を提げてお組の門を這入ると気の所為かゾツと致しましたから二人とも一生懸命に駆け出しましたが跡から誰か追駆けてくるやうな気がします<sup>24</sup>

吉兵衛は自分から「気の所為」だと言っておきながら、怖気を震い裸足で駆け出し帰路を急ぐ。もはや四ッ谷左門町に在るだけでお岩の祟りの渦中に身を置くやうな心

23. 同上、1896年、118-119頁。

24. 同上、1896年、124-125頁。

境になっていることがわかるが、この後にお玉のために呼び寄せられて枕経を上げていた妙善が、錯乱した河井三十郎によってお岩と見間違えて斬り殺されてしまう。さらに與左衛門宅で押し込められていたお兼までもがお岩に縄を解いてもらったとって登場し、河井の門口で通りがかりの町田仁左衛門に声を掛けたところ、「お岩が出たか」と言ってそのまま抜き打ちにされてしまい、その挙句屋内から飛び出してきた河井と二人がかりでめった斬りにされる。この後もお岩の祟りの被害はさらに拡大していき、物語の上では何の因果関係も語られておらず「伊右衛門に加担した者」かどうかも明確にわからないような人物にまで広範囲に及んでいく。

長兵衛宅から河井宅までで起きた一連の事件はまだ柳桜口演『四谷怪談』の序の口に過ぎないが、呪いの文句が発せられてから祟りの現象が鎮められるまでの犠牲者を一覧表にすると以下のようなになる。

- ① 長兵衛の乳飲み子
- ② 長兵衛の女房お瀧
- ③ 伊藤快甫
- ④ 三十郎の娘お玉
- ⑤ 妙善
- ⑥ 與左衛門の女房お兼
- ⑦～⑩ 山田屋の関係者
- ⑪ 遊女かしく
- ⑫ 伊藤喜平
- ⑬ 溝口半兵衛
- ⑭ 風車長兵衛
- ⑮ 山田惣右衛門
- ⑯ 高橋傳右衛門
- ⑰ 伊右衛門の女房お花
- ⑱ 民谷伊右衛門（\*町奉行によって処刑）

例えば、三千石取りの旗本稲川将監の

息子で伊藤快甫の養子となった伊藤喜平は馴染みの遊女かしくに心中を振られたことをきっかけに遊郭山田屋で無差別殺人を引き起こす。しかしこの出来事も、お岩の祟りを恐れるあまり伊藤宅に居たたまれなくなった喜平が、伊藤家との離縁を将監に申し出たところ叱責を受け斬り捨てるとまで言われたことが原因であり、間接的ではあるがお岩の呪いの文句から尋常ならざる事件が発生したということで一覧表に数え入れている。同様に、お岩の夫で全ての元凶となった伊右衛門は祟りの存在を頑なに拒んでいたのだが、最終的には町奉行所において処刑の憂き目に遭っており、そこまでの経緯を踏まえてここに計上している。

以上のことをまとめると、今古実録版の『四谷雑談』と柳桜口演の『四谷怪談』には特に三つの相違点が見られるようである。

①「祟り」の範囲

「田宮家の化物屋敷」と「四ッ谷左門町」

②「祟り」の対象

「田宮、伊東、秋山三家の親族」と「左門町の住人全員」

③「祟り」の結末

「三家の断絶」と「鮫ヶ橋妙行寺にお岩の墓所を建立」

柳桜口演が乾坤坊良斎作とされる落語版の古い型をどれほど残しているか判然とせず、速記本の内容に噺家個人の創意工夫がどれほど含まれているか明確にはできないが、①②を見るとお岩の祟りによって発生する災厄の規模が実録小説から落語へと翻案される過程で、地理的・空間的に拡大しているように見受けられる。

また③について、今古実録版の後書にも「お岩稲荷」と「妙行寺」への言及があるが、落語版では噺家の柳桜が自分でお岩

の鎮魂のために墓所を新たに建立したと言っている。前者がお岩の祟りによる三家断絶という醜聞を伝えるジャーナスティックな枠組みを維持するのに対して、後者は話型として縁起譚になっており、仏教説話に起源を持つとされる怪談噺のこのような枠組みは、柳桜と同時代の噺家である三遊亭円朝の口演速記にも見られるものである。

さらに、巷説の表象という点から柳桜口演の特徴をまとめると、「お岩の祟り」を（ある場合には嬉々として）伝達したがるのは、藤右衛門の使いの者あるいは使用人である角助や吉兵衛のようなお岩とは身分違いの者たち、あるいは民谷家とほとんど縁遠い左門町の住人であることがわかる。浅草花川戸に住むお瀧と長兵衛夫婦のような例外も存在するが、長兵衛は民谷家の婿探しに協力して伊右衛門を連れて来た張本人であり、それもあってか畏れ多くもお嬢様であるお岩には個人的に良くしてもらったとお瀧自身が回想している。四ッ谷左門町全体で恐慌を来しているとは言え、彼らのせりふからは、不条理で理不尽なように見えるお岩の呪いにも規則があって、被害者にはその理由があるはずだという信念が読み取れる。これこそが祟りの影響とは無縁を装って伝達したがる者たちの心性なのであろう。しかしながら、そのようにして距離を取りながらも決して安心し切れずに左門町の門前で怖気を震い裸足で駆け出すなどという吉兵衛の行為は、災厄のとばっちりを受けまいとするいわば一般住民の反応としてたいへん興味深い。

結

以上見てきたように、柳桜口演『四谷怪談』においてお岩の呪いの文句は人から人

へと口伝えで広がっていく。お岩の言葉を直接耳にしていなくても、彼女の呪いを知っているだけで祟りに巻き込まれる可能性がある。落語版の物語は、こうした理路で構造化されているため、左門町に住む登場人物はみなどれほどお岩から縁遠くても決して安心できないのだというメッセージがそこに含まれることになる。ある者はお岩に成り代わって呪詛を語り自ら死んでいき、またある者は他人の姿に彼女の影を見て人殺しをする。伊右衛門の謀略に直接参与せずとも、親族は言うに及ばず、一見無関係に見える者たちまでをも巻き込んで祟りの被害は拡大していく。寄席の聴衆は、果たしてこれをどう受け止めていたのだろうか。本稿の冒頭でも紹介したが、関根黙庵が伝える逸話では、最晩年の『四谷怪談』は恐ろし過ぎて寄席から客足が遠のいたため、柳桜は怖みを消して演じたと言われている。速記本は噺家の死後出版であるため、おそらくこの時期の口演ではないかと推察されるが、その恐ろしさはまさに折り紙付きであると言って良いだろう。十日興行で語られたらしい柳桜口演の終局において伊右衛門が死んでもお岩の騒動は解決されたわけではない。噺家が彼女の魂を鎮めるべく墓所へ参詣するよう聴衆に呼び掛けているということはおそらく、明治29年においてもお岩の怒りはまだ収まってはいないのである。<sup>25</sup> 多田省軒が言及した一二三館からの出版経緯にしても、「実績」である柳桜の速記本を普及させることによってお岩の「神怒」

25. 歌舞伎の方で『東海道四谷怪談』の興行を打つ際に役者とスタッフ一同で於岩稲荷田宮神社を参拝する慣例があるが、横山によると、粗末にすると祟られるという伝承は少なくとも平成6年に至るまでは残存していたようである。横山、前掲著、1997年、250-252頁。

を鎮めて「神護」を得られるという内容なのだから、寄席の高座における祟りの現実性・実在性をさらに出版物の中に取り込もうとした形になる。

ところで速記本の読者は寄席の聴衆と同じ資格で柳桜口演『四谷怪談』の恐怖を味わうことができるだろうか？あるいは寄席の聴衆は物語に登場する左門町の住人と同じ資格でお岩の祟りに怖気を震うことができるだろうか？見てきたようにして、呪いの口伝えは物語の内部に祟りの境界線上で不安定に揺れ動く登場人物を配置することで、この文句を聞いた誰もを「安心できない」宙づり状態に陥れ、そこから鮫ヶ橋の妙行寺に実在するお岩の墓所へと参拝するところまでをつなぐ架け橋となっている。言い換えれば、読者及び聴衆が自分から巷説の表象に参与する方途を示すことによって、口演速記『四谷怪談』はお岩の祟りの被害者の位置に接近できる可能性を担保している。これはつまり、「怖いもの見たさ」を享受できる寄席の娯楽として怪談噺が成り立っているというだけでなく、そこから物語に参与した者たちが新しくお岩の呪いの媒介者となることで、さらなる巷説の伝播に一役買うことができるようにテキスト内部で組織化されているということになるだろう。上記の問いに対する答えについては今後の課題としなければならないが、とりわけ『四谷雑談』とのさらなる比較検討を念頭に置いて、お岩の祟りを鎮める宗教的職能者が物語の上でどのような役割を果たしているかを分析し、その結果からこうした『四谷怪談』のテキストの存在意義を問い直すことで、寄席の体験における恐怖の意味をある程度明確にできると考えられる。

さいとう・たかし  
南山宗教文化研究所第一種研究員